

# 『花蹊日記』に書かれた女生徒「節子」をめぐる一考察

跡見学園女子大学 文学部 現代文化表現学科 教授  
要 真理子

## はじめに

写真の人物は、久米せつ【図1】と言ひ、群馬県沼田市出身の実業家・政治家久米民之助（1861-1931）の最初の妻である。土木技術者として二重橋建設に関わる一方、能書家で能楽を嗜む趣味人でもあった民之助は、東京渋谷・代々木の広さ4万坪ほどの土地に800坪の邸宅を構えた<sup>(1)</sup>。「代々木御殿」と呼ばれるほど豪華な久米邸の庭には、能舞台が設えられ、そこでたびたび仕舞会が開かれた。本学の創始者跡見花蹊もまた、民之助主催の仕舞会や「深町の屋敷」の園遊会に参加している。代々幡村山谷<sup>(2)</sup>にあった久米家敷地内の松林は跡見女学校の遠足のコースにもなった。行事のための場所使用を目的とした実利的な関係だけでなく、実際、久米家の人々と花蹊は「特別な結びつき」<sup>(3)</sup>を有していたのであり、その交流は『跡見花蹊日記』（以下『日記』<sup>(4)</sup>）や『揮毫雑記』にも留められている。

本稿は、前年度（2022年3月）に上梓した共著論文『跡見花蹊から生まれた日本の前衛芸術』<sup>(5)</sup>の後記として位置づけられる。その際、久米家資料に係る実地調査の後で、本学の元教授高田美一が大学の紀要『英文学科報』に寄せた「エズラ・パウンドと跡見家の機縁」（1986年）のなかで、久米民之助の息子民十郎と跡見花蹊について言及していることを知った。「エズラ・パウンドと親交のあった日本のすぐれた前衛画家久米民十郎が跡見花蹊女史の戸籍上での孫にあたる」<sup>(6)</sup>。この事実は、パウンド研究者の角田史郎（当時 桜美林大学教授）が役所に依頼した文書調査と自身による遺族への聴き取り調査を介して明らかとなったものである<sup>(7)</sup>。筆者もまた、昨年度から開始したヴォーティシズム受容研究において、久米民十郎と跡見花蹊との関係をとらもつ「節子」という人物に遭遇することとなった。

久米民之助とせつのあいだには、前衛画家民十郎の他に、五島家の養女となり、その夫小林慶太（東京急行電鉄を創業）とともに家系を復興させた萬千代（1892-1932）、後に建築家となり、ブルーノ・タウト来日に尽力した権九郎（1895-1965）がおり、いずれも古典芸能の素養を有している。とりわけ民十郎と権九郎は留学のほか多くの渡航、海外暮らしの経験をもち、国際的な感覚も身につけていた。久米家の3人の子どもたちが、こうした教養や感性を民之助の影響下で育んでいったものと理解できるが、しかしながら、彼らの生母せつがどのような人物であったかは明らかでない。詳述されていないものの、角田や高田の指摘どおり、民之助の一代記『久米民之助先生』（以下「民之助伝」と略記）、および『沼田市史 通史編3』には、「せつ」について旧姓跡見、花蹊の養女であることが明記されている<sup>(8)</sup>。その一方で、「久米せつ」の養母とされる跡見花蹊の方から調べてみると、『日記』に「せつ」についてと思われる記述をいくつも見出すことができる。

本考察では、『日記』に留められた一人の女生徒の足跡を辿りつつ、花蹊のフィランソロピストとしての側面に注目する。明治以降急激に近代化を遂げた日本社会においては、欧米圏で見られるような利他的な博愛精神に基づく活動が限定的に展開され、個人がそれに参与するしきみは盤石ではなかった。花蹊の開いた学び舎では、生徒らを校外行事や催事に積極的に参加させ、プライベートにおける交流も盛んであった。花蹊が事情ある生徒を「お塾」で面倒を見ることもあったようだ。『日記』のなかで「節子」と呼ばれる女生徒もまた花蹊の愛情を受けお塾から巣立った人物の一人である。この女生徒が実は民十郎の生母「せつ」であり、さらには、その雅号を「花庭」と称したのではないかという一つの見通しを明らかにしたい。



【図1】写真「その生母 お節の方」  
\*写真添え書きは、寄贈時のもの。

出典：神奈川県立近代美術館蔵。久米民十郎旧蔵資料。

# 1. 「節子」という少女

前述のとおり、跡見女学校の特徴は、たくさんの生徒を寄宿させた「お塾」形式の家庭的な性格にある。編纂された『日記』を見ると、年末年始にも帰省できず花蹊たちとお塾で過ごす寄宿生のエピソードが認められる。たとえば、明治22年元日において、花蹊が生徒年越者らとともに椒酒や雑煮を食し新年を祝い、その翌日、家族でかるた遊びをしたことが書かれている。「家族でかるた遊びをしたことが書かれている。「家族、千よ滝、愛治郎、知久、桃子、節子先在。作骨牌遊戯 […]」<sup>(9)</sup>。このとき、「節子」という生徒が花蹊の家族とともに正月を過ごしたようだが、前日の年越者のなかに名前はない。

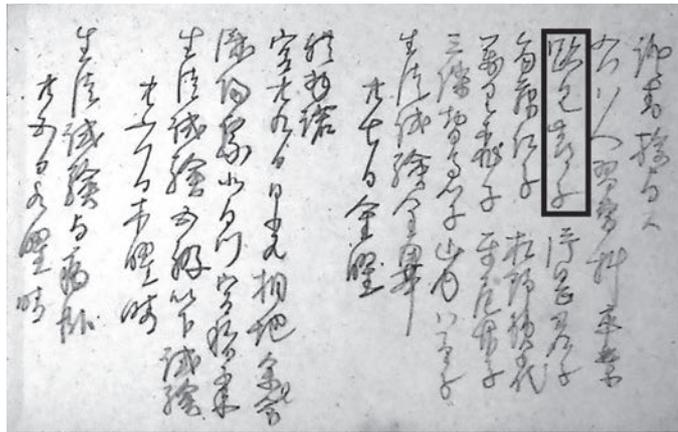
彼女の名前が最初に登場するのは、さらに、遡ること明治18年10月18日の記事においてである。「田畑（端）田村氏別荘に招かれ、父重敬、姉千よ滝、予、女弟子智恵君様、李子、竹子、鉄千代、節子、増子を携て、正午茶事二招かれ […]、主人より席上揮毫を乞れ、各合作して一大妙画をなす」<sup>(10)</sup>。この記事のなかで、節子は李子らとともに女弟子の一人に数えられ、花蹊の父ならびに姉とともに東京紡績の設立者である明治期の実業家田村利七の別荘を訪ね、「一大妙画」の制作に携わっている。田村は、小石川柳町校舎建築に尽力した一人であり、記事にあるとおり、娘の増子も女学校に在籍していた。

次に『日記』に節子が登場するのは、明治21年7月27日の記事である<sup>(11)</sup>。「[...] 金曜 生徒試験全畢。三条智恵子、山内八重子、万里桃子、平尾竹子、斉藤仁子、松野鉄千代、跡見節子、片岡君子、右八人習字科卒業証書授与ス」【図2】。手稿でも明らかなようにこのとき早くも跡見姓であった節子は花蹊が担当する授業科目「習字」で優秀な成績を取めた。同年の12月15日の記事には、「三級生田辺朝子、桃子、節子、片岡君子、三橋久子五人、授褒賞」とある<sup>(12)</sup>。

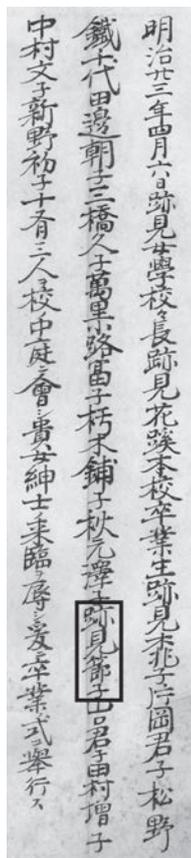
『写真で見る跡見学園の歩み』によれば、当時の跡見女学校には本科と予科（いずれも修業年数4年）があり、各学年で9科目（国学、漢学、数学、習字、絵画、裁縫、琴、点茶、插花）のなかから選択した科目で優秀な成績を取めた生徒には賞が与えられたとされ、花蹊の記述と合致する<sup>(13)</sup>。明治21年11月、花蹊が横浜市浅間町の茂木惣兵衛を訪ね、書画を教授したときには、節子を同行者に選んでいる<sup>(14)</sup>。その

一年後明治22年7月の定期試験成績表を見ると、「英学部」「漢学部」「和学部」ごとに第一級から第七（あるいは八）級、和学部は甲と乙に分類されて、生徒たちの評価が点数で記載されている<sup>(15)</sup>。本学所蔵の資料では、明治27年の課程表までしか遡ることができず、当時の成績表の「学部」と設置された「科目」との関係については未確認であるが、設立当初にはなかった「英学部」の記載から、明治22年当時、跡見女学校では英語が重視されていたことがうかがえる。花蹊が外国人教員を積極的に雇い入れていたのもこの時期であった<sup>(16)</sup>。実際、明治18年から19年の花蹊の手帳には、英語の発音を学習したと思われるカタカナ表記の単語や短文が残され、それらは数十ページに及んでいる<sup>(17)</sup>。成績表の「英学部」では、第二級に李子（跡見桃子）をはじめ、田辺朝子、三橋久子、「漢学部」では、第一級に田辺朝子、片岡君子、第二級に三橋久子、「和学部」の甲科に跡見桃子<sup>(18)</sup>、片岡君子、三橋久子、田辺朝子と褒賞を得た4名が確認できるものの節子の名前は「漢学部」、「和学部」も含め残念ながら見つけることが出来なかつた。

しかしながら、明治22年1月8日の跡見女学校移転開校一周年記念祝式においては、節子が李子の姉、万里小路富子や神田琴子とともに「君が代」他2曲、唱歌を披露したことが記されている<sup>(19)</sup>。そして、記念すべき第一回卒業式が行われた明治23年4月6日の記事では、卒業生13名の氏名が明示され、生徒らに卒業証書が授与されたことが書かれている。「全科卒業生、跡見桃子、同節子、片岡君子、松の鉄千代、三条智恵子、平尾竹子、山内八重子、万里小路富子、秋元沢子、朽木鋪子、田辺朝子、三橋久子。英学卒業、田村増子、山口君子、中村文字 […]」<sup>(20)</sup>とあり、跡見学園女子大学に残されている当時の花蹊の式典挨拶からも「跡見節子」の名前が9番目に読み上げられたことがわかる【図3】。ところが、跡見学園校友会情報検索システムでは「跡見節子」は



【図2】『花蹊手帳』4（明治21年3月～明治22年8月）129頁。左から縦書き。\*枠線は筆者による。出典：花蹊記念資料館蔵。



【図3】「第一回卒業式訓辞」（部分）、卒業生氏名9番目が「跡見節子」。\*枠線は筆者による。出典：花蹊記念資料館蔵。花蹊先生の直筆。

見つからない<sup>(21)</sup>。跡見学園女子大学50年史、その他記念刊行物においても第一回卒業生13名のなかに節子の名前はなかった。

公式な記録からは探すことが難しい一方で、第一回卒業式のおよそ一年前、明治22年2月20日の記事に付け加えられた「○十日日記」の内容は非常に興味深い。この日、阿部氏なる人物が「佐々木三辰子」との結婚の祝宴を芝紅葉館で挙行了。三辰女史<sup>(22)</sup>は明治初期の番付表に花蹊とともにその名を留める閨秀書家であった。結婚式の来客として、東京府知事高崎五六男爵、滋賀県知事井弘夫妻のほか、政治家や実業家が30人ほど参席したようである。この記事で、注目すべきは次の文章である。「余〔花蹊〕、節子応請待、午後三時紅葉館」<sup>(23)</sup>。最初の句を文字通りに解釈すれば、「私と節子は招待に応ずる」となるだろう。だが、様々な方面で活躍する要人たちに紛れて女生徒の節子かなぜこの祝宴に招かれることとなったのであろうか。

他方、招待客のひとり、「井上氏」が、明治11年に工部大学校（東京大学工学部の前身）の上位機関である工部省の大臣を務めた井上馨であれば、同校を主席で卒業し助教となった久米民之助<sup>(24)</sup>との接点が見えてくる。井上は明治19年に民之助が工部大学校助教授を辞した後に入職する大倉組商会の大倉喜八郎とも関係が深い。いずれにせよ、花蹊が記録した祝宴の参席者のなかに久米民之助の名前はなかったものの、この宴の関係者が節子を民之助に紹介したということは大いに考えられる<sup>(25)</sup>。

明治21年に欧米視察旅行から帰国した民之助は、明治23年に大倉組から独立し、赤坂溜池に久米工業事務所を設立した<sup>(26)</sup>。そして、同年に開催された跡見女学校第一回卒業式から2週間も待たずに、4月19日、民之助は小石川植物園で節子と見合いをする。4月28日の記事には、「入興久米氏、於桜雲台結婚式執行 […] 久米氏、節子、六時旅行箱根ス」<sup>(27)</sup>とあり、初対面から二人の婚儀までわずか10日余りであったことがわかる。結婚を見据えて節子を一時的に養女にしたのではないか。これ以降、節子が久米家を離縁されるまでの結婚生活については民十郎と花蹊との関連も含めて既出の原稿で述べているため、ここでは詳述しない。

## 2. 久米家からの離縁とその後

久米民之助は能や書を愛好し、しかも堪能であったゆえ自ら演者となることもあった。既述のとおり、上演のための舞台が邸宅の一角に設えられたほどである。二人の結婚後、花蹊は揮毫や舞台鑑賞のために久米邸を何度も訪れている。ところが、明治23年に久米家に嫁いってから7年後、明治30年7月27日、節子は突如として離婚される。民之助伝では、節子のエピソードに頁が割かれることはなく、婚姻と離婚の日付が年表に記載されているのみである<sup>(28)</sup>。しかし花蹊の日記では二人の結婚、新婚旅行、孫となる三人の子の誕生、祝や土産のほか、ちょっとしたお茶菓子などの贈り物まで事細かに記録されており、花蹊が節子家族との交流を心から喜び楽しんでいる様子が見て取れる。ことさら離婚騒動さなかの『日記』を見ると、言葉の端々から感情の動きが伝わってくる。明治30年7月5日、「久米氏、節子へ難題ヲ持掛、愛治郎〔ママ〕に兎も角も節子を預け、連帰りくれと聞入らざるよし。此夜の惨状言葉にも尽し難し。久米及其母、其姉の薄情、とても人間には非ざるよし也」<sup>(29)</sup>。この記事には、「惨状」と「薄情」、「とても人間には非ざるよし」と一方的に離縁を迫った先方の理不尽さを強い調子で非難する言葉が散見される。

民之助伝に一行で書き表された離婚劇の展開を花蹊の日記からもう少し追ってみたい。再度7月5日の記事より、花蹊の弟愛四郎が久米家に節子を迎えに行き、翌日浅草に預ける。8日に離縁状を持参した民之助が直接花蹊を訪問する。節子は五軒町の跡見家に預けられる。9日にはさっそく久米家から節子の荷物が返されてくる。「同荷物ハ七荷なるに、箆子（筒）三本、長棹一本、是も極古き子供の着替入と取替て、その中には、綿入一枚、袷、単、すきや（透綾）、浴衣枚（ママ）と、帯一筋、手箆子（筒）ニハみなから（空）にして、本箱には一本もなし。夜具一組と也。すへて頭の道具ハ一組、極粗末なるのみ也。可驚」<sup>(30)</sup>。その後、花蹊は五軒町に預けた節子に会いに行き、「節子の心の落付様にして、あまり泣涕をいたさぬ様とての事」<sup>(31)</sup>と案じている。20日に民之助の代理人を介して書類が届けられ、民之助伝の年譜にあるように27日に離婚が成立する<sup>(32)</sup>。その間、花蹊は五軒町に足繫く通っている。

離縁された節子が預けられた「五軒町」とは、具体的には誰の家であろうか。五軒町には、姉小路家公義、花蹊の姉の千代滝と姉小路家の家令を勤める長弟、重威・治子夫婦が住んでいた<sup>(33)</sup>。明治24年に千代滝は亡くなっているから<sup>(34)</sup>、節子が預けられた先は、重威のところではば間違いないだろう。跡見家に戻されてから約1年もの間、花蹊は節子の滞在先に何度も会いに行っただけでなく、花見や観劇、旅行などに連れ出して、手を尽くして気分を晴らし悲しみを癒そうとしていたように見える<sup>(35)</sup>。また、花蹊が縁をとりもった横浜の原三溪・屋寿夫婦や閑院宮家に輿入れた女弟子三条智恵子の訪問に節子を同行させたりする一方で、田村利七の娘で同窓の増子の看病に彼女を差し向けたりしている<sup>(36)</sup>。離婚から一年半を経て、明治31年12月29日に節子は五軒町を後にする。「節子、朝十一時愈帰国す」<sup>(37)</sup>。いったい彼女はどこに帰ったのだろうか。節子の出自もその後の行き先も『日記』や『手帳』には書かれていない。

節子が「帰国」してから1年後、明治33年1月28日、民之助が3人の子どもたちを連れて花蹊を訪れる。「子供等大みに成長して、皆々学校へ出るよし、清書など持来る。大悦にて夫に付ても涙のみ。久米氏も共に涙にむせふ」<sup>(38)</sup>とあり、「とても人間には非ざるよし」と憤っていた花蹊だが、どうやら民之助と和解できたようである。その後、花蹊と民之助やその子どもたちとの関係は良好であり、冒頭で述べたとおり、彼が代々木に新居<sup>(39)</sup>を構えた際には揮毫しに行ったり、また女学校の行事でその場

所を使用したりすることもあった。校医の井深玄真によれば、花蹊が大往生を遂げる間近、病床にあつて民之助に礼を述べたとされる——「久米さん大きに有難う小供を大切に下さい」<sup>(40)</sup>。

二人の離婚劇の真相は明らかにされていない。しかしこの離婚から約半年後、民之助は第5回総選挙に群馬第1区から無所属で立候補し、当選しており、このことが一因となっているのではないかと推測するのみである<sup>(41)</sup>。

### 3. 花庭と節子、そして幻の合作画

ところで、『日記』には、節子の名前が初めて登場する明治18年10月18日の出来事について書かれた同じ内容の記事が異なる文体でもう一つ存在する。「期十一時、同家蔵〔重敬〕、花海〔千代滝〕、茗橋、拉女弟子花堤君、花洲、花外、花濤、花庭、増子、到田畑村田村家〔…〕主人乞席上揮毫、各合作得一大図」<sup>(42)</sup>。先に紹介した記事と漢文体の記事との違いの一つは、田村家での茶事参加者のなかに花蹊の弟、愛四郎がいたかどうかである。幸運にも、この日のことは愛四郎の『茗橋日記』にも留められており、彼もまたこの場にいたことがわかる。「与 家蔵〔重敬〕、両家姉〔千代滝と花蹊〕、及花堤、花洲、花濤、花外、花庭諸女子、到田村氏〔…〕又有書画合作及俗所謂福引等戯」<sup>(43)</sup>。「茗橋」とは、愛四郎の雅号である。彼の日記では、女学校の生徒の記述にほとんど雅号が用いられていた。両日記に書かれた生徒の雅号と本名を一つひとつ照合していくと、花堤=智恵君〔三条智恵子〕、花洲=李子、花濤=鉄千代〔松野鉄千代〕、花外=竹子〔平尾竹子〕となる<sup>(44)</sup>。問題の「花庭」については、田村増子か節子のいずれかのはずだが、増子の雅号は「花籠」であるから、残された名前から推測して、それが節子ということになる。

節子が花庭であるならば、『日記』の「人名雑録」を見る限り、この名を命号された「丸山源七養女」こそ該当の人物と考えられる<sup>(45)</sup>。『三百藩家臣名事典』を見ると、源七は天保元年（1830）年、安倍親則の婿養子となって親任、通称を甚兵衛と改めている<sup>(46)</sup>。仮に、この人物のことを指しているならば、節子の父親は、郷土史家で『筆濃余理』の著者安倍親任（1812-1878）とみなせるだろう<sup>(47)</sup>。源七には三女一男がいたとされるが、あいにく養女の記録はない。その一方で、花蹊の「人名雑録」では、節子のほかに梅子という生徒の養父も丸山源七との記載があるが、彼女らが入塾した経緯は書かれていない<sup>(48)</sup>。さらに残念なことに、資料館で下書きも含めて探したが、明治18年10月18日の記事に該当する生徒らの記念すべき合作画は見つからなかった。

代わりにというわけではないが、最近になって法人事務局経由で花蹊記念資料館に移管された興味深い素描について触れておきたい。これらは下書きと思われ、同じ主題で2枚制作されている。いずれも花洲=李子、花竹=古屋錫、花鏡=河鱈千賀、花霽=平山楽、そして花庭の5名による「寄書き」である<sup>(49)</sup>。上方に花洲の手になる菊花、下方に花霽による水仙、その後方には花竹女史が描いた南燭、中央に花鏡の百合、その左に花庭作牡丹が描かれている【図4-a,b】。二枚の素描は同じ構図をとっているが、モチーフの配置が微妙に異なる。花蹊の「生徒寄書手本下絵」【図5】と比較すると、当然ながら花蹊の描くしなりのある線ほどの集中力や強弱、勢い、さらに紙面全体への意識は感じられない。一枚目の素描は、水仙と菊をつなぐ空間が広く、また草木同士の重なりから単調に見える。二枚目の素描では一枚目よりも軽やかではあるが、中間の墨色に幅がなくなかつ手早く描いたような印象を受ける。『日記』別巻の末尾や花蹊記念資料館のコレクション図録でも紹介されているように、このような「生徒寄書き」は何通りかの組合せがあつてすべて花蹊がお手本を準備していたのではないかと想像する。この素描が、いつどこで制作されたものなのかは不明である。解説書付も落款印もない。ただし、5人の生徒のうちの一人平山楽の入塾が明治19年8月20日であるから<sup>(50)</sup>、それ以降の制作ということになる。

節子と花庭が同一人物であるとして、「丸山源七の養女」と書き記された理由は解明できなかった。またしても、節子へと結びつく糸が途切れてしまった。

## おわりに

本稿の最初に示した久米せつの写真は、民十郎の長男久米正喜氏の妻トキ子氏が2000年に神奈川県立近代美術館に寄託したものである<sup>(51)</sup>。『英文学科報』のなかで高田が報じたとおり、角田史郎は正喜氏に会いに行き直接話をしている。その時遺族から聞いたとされる民十郎のエピソードと作品は、同美術館の水沢勉と筑波大学の五十殿利治によって検証され、現在まで研究が進められてきた。日記を事実として受け止めるなら、節子（せつ）を介して結ばれた民十郎との関係から花蹊が国際的な前衛画家の作品制作に影響を与えたということも考えられる。

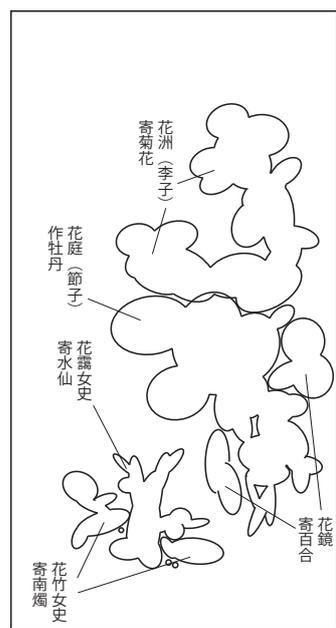
書道と絵画を重視した跡見女学校の教育は、画家の母を生み出すばかりでなく、「厚德会」の活動と相まってフィランソपीーの精神も育てている。花蹊は、しばしば国家主義寄りの教育者とみなされる傾向にあるが、早い時期に英語教育を実践し、フランス系アメリカ人外交官チャールズ・ルジャンドルと芸者池田絲の間に生まれた娘（後の関屋愛子）ほか、外国人の子女も受け入れている。節子を養女としたのは、生徒の幸せを願う、このような慈愛に満ちた精神のゆえであつたのではないだろうか。



【図4-a】 花庭書画「生徒寄書下絵」  
制作年代不明。  
\*枠線は筆者による。  
出典：花蹊記念資料館蔵。



【図4-b】 花庭書画「生徒寄書下絵」  
制作年代不明。  
\*枠線は筆者による。  
出典：花蹊記念資料館蔵。



【図5】 跡見花蹊《生徒寄書手本下絵》紙本墨画・一幅、124.4 x 43.2 cm。  
出典：花蹊記念資料館蔵。

## 注

- (1) 久米権九郎「生い立ちの記」『久米権九郎追憶誌』（久米権九郎追憶誌編集委員会編）、久米建築事務所、1966年、8-11頁。民之助は代々木の区域内で複数の土地を所有したこと、大正初めに軍用地として提供し転居したことが書かれている。花蹊は「深町の屋敷」にも「代々木御殿」にも訪れている。民之助の住所について、『日記』別巻「知人録」では、「南豊島郡代々木村」（370頁）、「府下代々木 赤阪溜池」（448頁）。「弔問者名簿」では、「青山北町」（671頁）とある。
- (2) 代々幡村大字代々木字山谷。当時の地名については以下も参照した。京王帝都電鉄総務部編『京王帝都電鉄30年史』京王帝都電鉄総務部、1978年。
- (3) 五十殿利治『久米民十郎 モダニズムの岐路に立つ「霊媒派」』せりか書房、2022年、11頁。
- (4) 花蹊日記編集委員会編、『跡見花蹊日記（以下『日記』）』、第一～四巻（2005年）、別巻（2007年）、角川学芸出版。調査にあたっては跡見学園女子大学ウェブサイトに掲載されているデジタルデータも活用した（<https://www.atomi.ac.jp/univ/kakei/>）。
- (5) 要 真理子・前田 茂共著論文、『コミュニケーション文化』、2022年、1-18頁。
- (6) 高田美一、『英文学科報』1986年、1-3頁。
- (7) 同書、2-3頁。
- (8) 久米民之助先生遺徳顕彰会伝記部会編、『久米民之助先生』（以下「民之助伝」）29頁。『沼田市史 通史編3』、70頁に掲載された「久米民之助略年譜」では、民之助が29歳の年、すなわち1890（明治23）年に「跡見花蹊の養女せつと結婚」とある。
- (9) 日記、別巻、59頁。
- (10) 日記、第一巻、816頁。
- (11) 同書、別巻、33頁。同一の内容は、左からの縦書きの手稿、『手帳 4』、129頁にも見ることができる。
- (12) 同書、別巻、54頁。
- (13) 跡見学園編『写真で見る跡見学園の歩み』跡見学園、2000年、27頁。生徒は、9科目のうちから一科目以上選択し履修した。
- (14) 日記、別巻、50頁。
- (15) 跡見学園、前掲書、2000年、27頁。
- (16) 泉雅博・植田恭代・大塚博『跡見花蹊 女子教育の先駆者』、ミネルヴァ書房、2018年、123-124頁。
- (17) 『花蹊手帳』3、明治18-19年（花蹊記念資料館蔵）
- (18) 日記では、明治22年9月29日に李子が花蹊の養女となったことが記されている。「作花蹊養女〔…〕結親子契約、有其式、挙家歓喜ス（第二巻27頁）。また、その状況については、『女子教育の先駆者』145-147頁で解説されている。
- (19) 日記、別巻、60頁。明治22年1月8日付の記事、「本校移転開校一周年祝式執行ス」。
- (20) 同書、第二巻、42頁。明治23年1月8日付の記事。
- (21) 参照した「第一回卒業式訓辞」（部分）の画像提供、検索システムでの調査は花蹊記念資料館に依頼した。
- (22) 「佐々木三辰」は、本名を「米」という。瀬木慎一『江戸・明・大正・昭和の美術番付集成 所外の価格変遷二〇〇年』、里文出版、2000年を参照。東京文化財研究所「書画家人名データベース（明治大正期書画家番付による）」で名前を引くと番付表に掲載されており、「大日本書画価格表」では、会津出身であること、「皇国名誉人名富録」では、「両国」在住であることがわかる。（<https://www.tobunken.go.jp/>）（2023年3月20日確認）。文中の「三辰子」は、三辰の子とも、本人とも解釈できる。
- (23) 日記、別巻、66頁。明治22年2月20日付の記事。文構造から二人を招待したのは「阿部氏」と思われる。
- (24) 「久米民之助先生年譜」民之助伝、28頁。
- (25) 「〇十日余記」には、「来客、府知事高崎、滋賀県知事、中井氏夫婦、井上氏、榎林氏、伊集院夫婦、其外凡三十人余、盛会也」と書かれている。伊集院姓で考えられるのは、兼常と兼寛だが、他の招待客との関係を考慮すれば、茶道にも造詣の深い前者ではなかろうか。「井上氏」に関して、名前の順が両知事の次であるので、別の人物であるかもしれない。たとえば、井上光や井上泰蔵（明治30年8月9日付の日記では節子と同日に花蹊を来訪）といった名前を日記で目にするが、だからといって彼らが祝宴の主催者と関係があるとは限らない。
- (26) 『沼田市史 通史編3』（前掲）の「久米民之助略年譜」、また『海を渡った幕末明治の上州人』（前掲）、77頁より。
- (27) 日記、第二巻、43頁。「久米民之助先生年譜」70頁では、5月8日「跡見せつと婚姻」とある。結婚式は浅草八百善が営む高級料亭上野桜雲台でとり行なわれた。
- (28) 「久米民之助先生年譜」70頁。
- (29) 日記、第二巻、464頁。

- (30) 前掲書、465頁。
- (31) 前掲書、466頁。
- (32) 前掲書、467頁。
- (33) 前掲書、数多くきりがなが、主な例を挙げておく。明治23年6月5日「往五軒町姉伯邸、帰」(45頁)、明治25年1月27日「五軒町跡見え […]」(65頁)、9月2日「昨明治廿四年、千代滝療病、往五軒町姉邸 […]」(121頁)、明治26年5月20日「五軒町重威来」(195頁)、7月16日「五軒町跡見より砂糖一箱 […]」(209頁)、8月8日「五軒町重威よりなすひ、きうり一籠」(214頁)など。
- (34) 藤井瑞枝編『花の下みち』實業之日本社、1919年、160頁。明治24年12月1日の日記より「[…] 姉千代滝五十五歳にて病死す […]」。翌年9月2日の記事のなかに千代滝の病状が書かれている。食道がんであった。注(31)を参照。
- (35) 前掲書、第二巻、466-534頁。「川上座」「仕舞会〔観世〕」「観花の宴」「祖先祭り」などの言葉が並ぶ。書と能は、民之助と節子の共通の趣味であったのかもしれない。
- (36) 前掲書、明治31年5月14日「午下、愛治郎、桃子、節子を連れて横浜原氏二行、一宿」(515頁)、6月4日「愛治郎、栄子、節子、原氏二行」(519頁)、6月13日「節子、横浜三の谷二行」(521頁)。「横浜三の谷」は、明治35年に原氏が三溪園(横浜)を建設した土地である。原三溪(富太郎)は跡見女学校の教員であり、花蹊の仲立ちで教え子の屋寿と結婚し原家の婿養子となった。明治31年4月15日「桃子、節子、愛治郎、閑院宮に詣す」(511頁)。同年、3月21日「此夜、節子、田村氏へ夜とぎに遣す」(506頁)。
- (37) 前掲書、548頁。
- (38) 前掲書、620頁。
- (39) 子どもたちの成長の過程で、代々幡村大字代々木字山谷から代々木上原1277へ転居したようである。『追憶誌』11頁参照。同じく五十殿、2022年、13頁。また、花蹊の『揮毫雑記』明治43年(1頁)では、「9月落成」の文字が読み取れる。代々木新居の能楽堂のことではないかと思われる。
- (40) 井深玄真「病床の花蹊先生」中野一夫編『跡見花蹊教育詞藻』跡見学園、1995年、169頁。
- (41) 民之助の政治家としての活動については、『沼田市史 通史編3』、72頁以降を参照。そして民之助の略年譜によれば、久米桐葉取締役を務めた津田榮吉の娘、と代との政略的とも言える再婚は、ようやく大正7年、民之助57歳のときである(同書、70頁)。さらに、節子の国籍を離婚理由とする説もあるようだが、確認できていない。
- (42) 日記、第一巻、816頁。解説によれば、日記上段は「第十号」、下段は「第十一号」、それぞれ別の書誌に所収されたものである(同書、790頁)。
- (43) 「茗橋日記」、日記、別巻、320頁。
- (44) 「人名雑録」3、[花号名録]日記、別巻、487-493頁。
- (45) 同書、492頁。
- (46) 家臣人名事典編纂委員会『三百藩家臣名事典』第一巻、新人物往来社、1987年、353頁。
- (47) 安倍親任『筆濃余理』鶴岡市、1977年。鶴岡市編纂会による「安倍家の系譜」(10-15頁)には、親任までの家系が簡潔に解説されている。なお、秋田公文書館には、安倍親任の家系図はもとより、なぜ丸山姓を名乗ったかなどを記録した文書がある。しかしここにも養女の情報はないとされる(2022年11月22日秋田公文書館よりメールにて回答)。また、安倍氏系譜は、明治4年春から明治9年までのもので、その間、源七が東京に行った記録はない(2022年12月26日秋田公文書館よりメールにて回答)。
- (48) 「人名雑録」3、[花号名録]、前掲書、493頁。丸山梅子は、注14で言及した「明治22年7月の定期試験成績表」「英学部」第三級の最下位67点、「漢学部」第三級75点、「和学部」乙科65点の成績が掲載されている。前掲書、27頁。
- (49) 「人名雑録」3、[花号名録]、前掲書、487-493頁。
- (50) 「[…] 横浜平山栄、拉娘楽子来、乞入塾」日記、第一巻、880頁。
- (51) 水沢勉「久米民十郎の寄贈作品について」『神奈川県立近代美術館』年報、2000年。ただし、「久米せつ」の写真については詳細不明。本稿で使用した画像は、筆者が2021年9月22日に美術館における調査で許可を得て複製したものである。

謝辞 考察のために、手稿等の活字起こしの必要や解釈が複数生じた際、奈良教育大学の萱のり子先生、本学人文学科の加美甲多先生、安本真弓先生にご助言をいただいた。花蹊関連の資料・作品調査に関しては、資料館館長の横田恭三先生をはじめ、職員の皆様大変お世話になった。心からお礼申し上げる。